

モンゴルのマイノリティにおける伝統復活とエスニシティ変動 —西部地域のカザフとモンゴル系エスニック集団をめぐって—

スヘー・バトトルガ

はじめに

20世紀のモンゴル¹は、「社会主義化」と「その放棄」という大きなうねりを2度経験している。

1924年、旧ソ連に続いて世界で2番目の社会主義国として、「モンゴル人民共和国」となり、かつての遊牧社会は「社会主義化」によって「近代化」したといえよう。しかし、社会主義的かつ革命的文化の発展・進歩の背景には、国民財産の没収（1930年代）、家畜の強制的集団化（1930—1950年代）、大規模な政治粛清、伝統への批判、信仰の制限もあった。

モンゴルは、「社会主義の放棄」によって1992年に「モンゴル人民共和国」から「モンゴル国」となり、「市場経済化」体制へ移行した。その結果、社会主義モンゴルの象徴であった「ネグデル」²が解散され、国有財産の私有化によって家畜は再び国民の手に戻った。また、政治粛清被害者の無罪・名誉は回復された³。

モンゴルにとって「社会主義の放棄」とは、「人権、自由、正義、民族統一の尊重、歴史、文化伝統の継続、そして、人道的かつ人民中心の民主的社会的構築と発展」（モンゴル国新憲法 1992年発行）を基本原則とした新しい国民国家の再編を意味するものであるといえる。

本論文では、エスニシティ⁴の視点から、ポスト社会主義モンゴルのマイノリティ社会の変化を考察する。筆者が主にフィールドとしているモンゴル西部辺境の「カザフ人社会」を事例として取り上げ、特に1990年以後のエスニック関係の変化に注目しつつ、カザフ人のカザフスタンへの移住とカザフ伝統文化の復興に関連づけて論じたい。

¹ 本論文での「モンゴル」とは、特に指摘のないかぎり、1921年の人民革命以後のモンゴル人民共和国（人民共和国となったのは1924年）と現在のモンゴル国を指すこととする。その面積は、日本のおよそ4倍（156万km²）、総人口は約260万人である。

² 社会主義化の時期、旧ソ連のコルホーズをモデルにして組織された農牧組合。

³ モンゴルの『日刊新聞』（2000年9月9日）によれば、1990年から10年間に30,000人の名誉が回復され、10,324人に総額86億2,400万トゥグルグの補償が支給されている。

⁴ 「エスニシティ」の定義は実に多様で、その概念は複雑であるが、綾部は、次のような定義を行っている。「民族集団とは『一定の文化体系のなかで、他の同種の集団との相互行為を重ねながら、なお自らの伝統文化とアイデンティティを共有している人々による集団』のことであり、こうした民族集団およびその成員が表出する特性をエスニシティとよぶ」のである[綾部 1993: ii]。

1 モンゴルのカザフ社会

モンゴルには 20 余りのエスニック集団があるが、大きくモンゴル系とチュルク系の 2 つに分類される。そのほとんどが西部地域（バヤンウルギー、ホブド、ウブス・アイマグ（県））に集中して居住している。モンゴル系エスニック集団（ハルハ、ブリヤートなど）が約 90%、それ以外がチュルク系エスニック集団で、チュルク系ではカザフ（約 4%）が主要なグループである。

カザフは、もともとシャーマニズム的土着文化の要素をも含んだイスラム教（スンニ派）を信仰する遊牧民であり、アルタイ語族に属するチュルク語キプチャク・グループのカザフ語を話す民族である。モンゴルのカザフ人は、モンゴルが清朝支配下にあった 1860-70 年頃、アルタイ山脈の西側（現在の中国の新疆ウイグル自治区）からアルタイ山脈を越えて東側（現在のバヤンウルギー、ホブド県）へ移住してきた遊牧民であった。そして、ヒヤグト条約

（1915 年、ロシア・中国・モンゴル）によって本来の部族から切り離され、モンゴルの住民となったのである。1930 年代までは、現在の西部の 3 県は「ホブデー・ヒヤズガール（ホブド辺境）」と呼ばれるひとつの行政地域になっていて、現在のホブド県にも多くのカザフ人が進出していた。しかし、1940 年、ホブド辺境は 3 つの県に再編され、そのひとつ「バヤンウルギー県」の設立によって、ウリアンハイ人とカザフ人が主に当県に居住するようになった⁵。

バヤンウルギー県が設立された 1940 年当時、県人口に占めるチュルク系カザフ人とモンゴル系ウリアンハイ人は、ほぼ同じくらいの割合を占めていたとい



ヤクの乳搾り



カザフの家族

⁵ 1960 年代以降の都市化、工場の建設によって多くのカザフ人が出稼ぎを目的としてバヤンウルギー以外の地域・都市部へ移住した。首都ウランバータルからおおよそ 100km にある中央県の石炭工場都市・ナライフ市におけるカザフ人区もカザフ人で稼ぎ労働者によってできた町である。その代表的な事例である。

う。しかし、カザフ人の増加とモンゴル系エスニック集団の人口減少によってバランスが崩れ、現在、カザフ人はバヤンウルギー県の総人口のおよそ9割を占めるようになっている⁶（表1）。

それに対して、「モンゴル人」と呼ばれるエスニック集団・ヤスタンは県全人口の7%しか占めていない（13郡のうちの10郡にモンゴル系のウリアンハイ、ドゥルベット、トゥバ、ハルハ合せて9900人が居住、モンゴル系の総世帯数は2400戸）（2005年現在）。

1940年以降、バヤンウルギー県の総人口はおよそ3倍に増加しているのに対して、ウリアンハイ、ドゥルブッド、トゥバなどのモンゴル系エスニック集団の人口は減少している。モンゴル国にとって、カザフ人は「マイノリティ」ではあるが、西部地域バヤンウルギー県においては、「マジョリティ」の立場にある。

表1 バヤンウルギー県におけるエスニック集団の人口（1989、2000年現在）

エスニック集団	1989	%	2000	%
カザフ	82750	91.0	80776	88.7
ウリアンハイ	5100	5.6	6528	7.2
ドゥルベット	1382	1.5	1397	1.5
トゥバ	737	0.8	1626	1.8
ハルハ	393	0.4	403	0.4
その他	455		284	
全人口*	90911	100.0	91068	100.0

出所: Mongol Ulsiin Undesnii Statistikiin gazar 2001, (*)モンゴル国籍を有しない外国人を含む。

2 エスニック・アイデンティティの表出：社会主義からポスト社会主義へ

モンゴルの「社会主義化」期の中心課題は、“Sotsialist Mongol Undesten”（社会主義的モンゴル・ウンデステン）を作りあげることであった。つまり、多数のエスニック集団・ヤスタスが、「平等と友好」という原則に基づいて、「形式的には民族的、内容的には社会主義的、特徴的にはインターナショナル的」たるひとつの民族「モンゴル・ウンデステン」を形成させるというのである（Badamhatan 1980:17-21）。

マジョリティであるモンゴル系ハルハを中心に「モンゴル・ウンデステン」が構成された。多くのエスニック集団が共存するモンゴル西部においては、チュルク系カザフ人の伝統は一部維持されたが、モンゴル系の「オイラート」と総称されるいくつかのエスニック集団（ドゥルベット、バヤト、オウールド、トルグード、ザフチンなど）は、ハルハ化していった。そして、ハルハ・エスニック集団は「ウンデステン」、それ以外の

⁶ 2005年現在、モンゴル国のカザフ人口は145,000人で、モンゴル全人口の約4%を占めている。一方、モンゴル西部のバヤンウルギー県全人口は9.5万で、その内およそ9割がカザフ人である（Bayan-Ulgii, 2005）。

エスニック集団は「ヤスタン」という認識が定着化していった。⁷

社会主義の時期には、カザフなどある特定のエスニック集団が他のエスニック集団より突出する動きは抑えられた。結果的には、民族問題は「マルクス・レーニン主義的理論に基づき、徹底的に解決された」として片付けられたのである（Tserenhand 2005:14）

しかし、1990 年以後、モンゴル国民の民族意識・ナショナリズムの高揚とともに、西部地域では多数のエスニック集団・ヤスタンが固有の民族意識を表明し、権利を主張した。西部の 3 県（バヤンウルギー、ホブド、ウブス）の内、特にバヤンウルギー県では、エスニック集団・ヤスタンによる団体⁸の間に対立が生じた。それは、マスメディアによって報じられ、チュルク系カザフ人とモンゴル系エスニック集団（ウリアンハイ、ドウルベド、トゥバなど）との関係をめぐる民族問題（民族紛争）として国民の注目を浴びたのである。

1990 年代前半の、モンゴル西部（バヤンウルギー県）に居住するカザフ人とモンゴル系エスニック集団との関係に注目しつつ、それぞれが何を求めて対立したのか、当時公開された資料の一部を提示してみたい。

カザフ民族統一運動がモンゴル国国民大会議に提出した要求は次の 6 点である。

1) モンゴルにいるカザフ人を「ウンデステン」と制定すること、2) バヤンウルギー県に対して自治権を与えること、3) モンゴル全人口に占めるカザフ人口の割合に対して国会議席数を与えること、4) 副大統領に、バヤンウルギー県からカザフ民族の代表を補選すること、5) カザフ語を正式公用語として認めること、6) 新憲法制定の際に、3-4 人のカザフ人を参加させること⁹。

また、カザフ民族の統一運動において、以下のような主張が述べられた（Islam 2000）。

カザフ人は、バヤンウルギー県だけではなく、ウラーンバートル市、ナライフ市、シャリーン・ゴル、ベルヒーン・オールハイなど都市と地方に住み、その数はおよそ 46000 人であるが、しかし、彼らの民族文化の発展と母語による教育は不十分である。

カザフ・インテリゲンチヤに対する国家支援がなく、政府関係機関のカザフ人採用は行われていない。カザフスタンと西部地域との交流、カザフスタンからの投資も政府は支援すべきである。

⁷ 藤井によれば、「「ウンデステン」は、現在ごく一般にわれわれが「民族」として扱っている範疇に対応することになる。一方「ヤスタン」は「ウンデステン」の下位範疇であり、ウンデステンを「民族」と訳すならば、これを「部族」のレベルに対応するものと便宜的に理解してもよい」（藤井 1998:117）。

⁸ 1990 年代はじめに、バヤンウルギー県にモンゴル系エスニック集団のウリアンハイ同盟、トゥバ民族を救う臨時委員会、ウリアンハイ・ドウルベド・トゥバ臨時連 合、オイラート人の利権を守る連合、オイラート連盟、ウリアンハイ・ドウルベド・トゥバ人社会支援連盟、チュルク系カザフ人のカザフ言語文化協会、ムスリム協会、カザフ友好協会が設立されている。

⁹ “Kazakh Undestnii ev negdliin hudulguun”（1990）より。

カザフ人の主張に対して、モンゴル系エスニック集団¹⁰は、次のように主張している (Chuluunbaatar, Onjoon 1990)。

我が政府は、1940年に、カザフ人とウリアンハイ人の両方の民族的特徴を重視し、その結果バヤンウルギー県が作られた。しかし、それ以来、カザフは、モンゴル系の人々を侮辱するようになり、(我々モンゴル人は)他の県や地域へ移住するよう言われるようになった。

我々が小学生だった頃、ウルギー市にあったモンゴル語学校の生徒は1000人で、その内のおよそ8割がモンゴル人であった。ところが、今はモンゴル人は2割しか占めていない。この頃、ひとつだけ残っているモンゴル学校を閉校し、その代わりにカザフ学校を作るという話も聞こえるようになった。

カザフ人の慣習、言語文化を発展させるとして、芸能・文化活動、県のラジオ放送はみんなカザフ語で行われるようになった。

カザフ人の主張に対して、ウリアンハイ人らは、1)カザフ人は(新疆からの)移民であるので、そもそも県の領土は我々の領土である。2)カザフ人と我々は同じ(マイノリティ)である、3)カザフ人口の増加とともに、我々はマイノリティ化している、と自分たちの民族アイデンティティを主張した。

1990年代のカザフ人とモンゴル系エスニック集団・ヤスタンの関係をめぐる動きは次のようにまとめることができる。

①カザフ人はバヤンウルギー県の自治権を強く要求していること。それに対して、モンゴル系エスニック集団の場合は、バヤンウルギー県における「カザフ化」を民族問題として提示し、あくまでも「カザフ人と我々(モンゴル系エスニック集団)は同じマイノリティである」と主張していること。

②モンゴル系エスニック集団は、これらの問題を「少数民族のなかの少数民族の問題」として解釈していること。(モンゴル・ウグサータン社会促進連盟のバトスフ氏)

③モンゴル系エスニック集団の人々は、政府の少数民族政策の必要性和強化を強く要求していること。

3 カザフ人の移住

1991年にはじまったカザフスタンへの「移住」は、彼らモンゴル・カザフ人による自発的かつ集団的なものであった。カザフスタンとモンゴルの2国間の4年労働契約に

¹⁰現在、バヤンウルギー県に、9900人のウリアンハイ人、ドウルベド人、トゥバ人、ハルハ人がいる。カザフ人は彼らを「モンゴル人」と呼ぶ。

よって始まった出稼ぎを目的としたこの移住は、家族の呼び寄せなどによって拡大化し、移民の数は最初の3年間でおよそ6万人に達した。筆者は、すでにカザフ人の移住問題について報告している（バトトルガ 2003、2004年）が、この移住の背景に、次のようないくつかの問題が関連している。

① 旧ソ連の崩壊—東ヨーロッパ、中央アジア諸国が続々と独立を果たし、一方、民族紛争が発生し、旧社会主義の国々の緊張状態がいつそう高まった。

② 1991年、カザフスタンはロシアから独立し、ナザルバエフ大統領が世界中のカザフ人を歓迎する意思を表明し、移民奨励政策が次々と発表された。これらの出来事は、カザフスタン以外の国にマイノリティとして居住するカザフ人たちのエスニック・アイデンティティを一層高めるきっかけとなった。

③ モンゴルの民主化によって、ナショナリズムが高揚し、モンゴル伝統が復興した。一方で、カザフの間では、モンゴル伝統の復活に反発する動きが生じた¹¹。

④ モンゴルの市場経済化とカザフ社会の経済状況：モンゴルが頼りつづけてきた旧ソ連の経済支援が停止し、急な市場経済化の導入によってモンゴル経済が悪化した。特に、辺境地域であるバヤンウルギー県の状況は最も著しく、県労働人口のほとんどが失業者となった¹²。

⑤ モンゴルとカザフスタンとの関係の強化：両国の外交関係が樹立（1992年）し、ナザルバエフ大統領のモンゴル正式訪問（1993年）、両国間の移住総合プランの調印、直行便の開始（1992年）などがあった。

このように、モンゴルのカザフ人による移住には、さまざまな外的及び内的問題が関係し影響を与えた。イスラム氏によると、2000年現在、6万人の内、3980人がカザフスタン国籍をとり、およそ15,000人のカザフ人がモンゴルに戻っている。

4 カザフの伝統文化の復興¹³

社会主義期における「国民」とは「社会主義的モンゴル民族」を意味し、「国民文化」とは「形式的に民族的、内容的に社会主義的、特性的に国際主義的（共産主義国的）」なものでなければならなかった。1924年の憲法では「全人民の完全な同権」が唱われ、1959年、ネグデル化の勝利宣言によって、モンゴルの社会主義化は本格化していく。「社会主義モンゴル民族」の形成と近代国家建設の手段として「芸能」は重要な意味を持つようになった。「芸能は、ラジオの時代¹⁴が始まるよりも前から、モンゴル国家建設と深く結びついていたし、1921年の人民革命当時、モンゴル語の識字率が

¹¹ 例えば、1946年に使用禁止となったモンゴル伝統文字（1204—1946年に使用）も復活したが、カザフ人の児童は、義務教育の一環として彼らが伝統するアラブ文字ではなく、モンゴル文字の学習が義務づけられた。

¹² 当県の失業率は、1992年に18.9%、1998年に11%、2000年に4.3%になっている。

¹³ カザフ伝統の復活の内容については、〈スヘー・バトトルガ 2007〉で扱った。

¹⁴ 1931年、モンゴルラジオ設立、1967年、テレビ放送開始。

0.7%だったモンゴルでは、文字媒体によって革命思想を宣伝することは出来なかった」（上村 2000）のである¹⁵。つまり、「芸能」は、モンゴル及びその少数民族に社会主義思想を普及させるために重要な役割を担ったのであった。

ところが、1989年の米ソ冷戦終結とその後のソ連邦解体によって、民主化運動が進展する。1992年2月発効の新憲法で、マルクス・レーニン主義の放棄、「モンゴル国」への国名の変更や私有財産・市場経済の保障などが規定される。無信仰教育、伝統儀礼の中断など規制が多かったかつての「形式的に民族的、内容的に社会主義的」国民文化が、「新しい」原則に基づいて「形式的にも内容的にも民族的」文化へと変化した。マジョリティであるモンゴル系ハルハがモンゴル伝統文化を復興する一方で、マイノリティであるエスニック集団もそれぞれ固有のエスニック・アイデンティティを強調し、伝統の復興を進めるようになった。

モンゴルの伝統文化復活の最も象徴的なものは、モンゴル国政府が2006年を「大モンゴル建国800周年記念年」として定め、1年間にわたって繰り広げられた事業である。その内容は多岐にわたるが、大きく、歴史的伝統を重視した記念事業と、伝統文化の継承・復活を観光開発と結びつけた記念事業との2つに分けることができる。

「歴史的伝統を重視した記念事業」は、全体として大モンゴル国を再現するという国家イデオロギーに関連したものである。モンゴル帝国時代に使われていたモンゴル文字、イフ・ザサグ（大法典）、ゲレゲ（許可状）、紙幣を復元し、政府機関に奉獻する式典¹⁶、チンギス・ハーンの霊廟と政府迎賓館の建設、チンギス・ハーン、オゴディ・ハーン、フビライ・ハーンなどの記念碑・像の除幕式（一部完成）のほか、「チンギス・ハーン情報データベース」、「モンゴル国家儀式習慣とシンボル」プロモーション・イベント（4月10日と5月26）などがそれである。

「伝統文化の継承・復活を観光開発と結びつけた記念事業」は、さらに、国家レベルのものとはエスニック・マイノリティに関するものと分けられる。前者の国家レベルの記念事業の最大規模のイベントは、モンゴル最大の祭り「ナーダム祭」（7月11～12日）と「騎馬隊スペクタクル」（7月10日～8月31日）の2つである。中央スタジアムで行われた「ナーダム祭」の開会式では、800人の馬頭琴演奏者、800人の長唄の歌手、800人の子供の体操が公演され、チンギス・ハーンを再現したパフォーマンスが繰り広げられた。「騎馬隊スペクタクル」ショーは、大草原を舞台に2時間、モンゴル国防省の協力のもとで、500名の軍人を起用して、13世紀のモンゴル騎馬隊の華麗な勇姿を壮大なスケールのなかで再現するというものである。国家事業として行われたこのブ

¹⁵ 革命期における芸能政策（20年代～40年代）、社会主義建設期における芸能政策（50年代～60年代）、社会主義成熟期 テレビ・ラジオ時代における芸能政策（70年代～80年代）、現代（90年代以降）（上村明2000）。

¹⁶ 2006年1月9日～13日、モンゴル文字アルファベットを教育文化科学省に、チンギス・ハーンのイフ・ザサグ（大法典）を法務内務省に、大クリルタイ（チンギス・ハーンの即位を決定した会議）が行われた黄金宮の模型を建設都市計画省に、ゲレゲ（ハーンが外交使節に発給した許可状）を外務省に、はじめての紙幣であったスフスを大蔵省に、大帝国の駅ネットワーク図を道路運輸観光省に奉獻する式典が行われた。

プロジェクトには、モンゴルの民間企業のほかに電通、HIS、伊藤忠商事、メディアマーケットなどの外国系企業も参加した。

一方のエスニック・マイノリティに関する記念事業としては、カザフの正月「ナウルズ」、カザフ文化芸術祭（バヤンウルギー県、3月22日）、オイラートの「西モンゴル・ビエルゲー踊りの日」（オブス県、3月25日）、「アルタイ叙事詩とホーミーの祭り」（ホブド県、3月27日）、ブリヤートの円舞「ヨーホル・ナーダム」（ヘンティ県、6月10日）、トゥバの「ツァータン（トナカイ牧畜民）フェスティバル・シャーマン祭り」（フブスグル県、8月26日）などがそれである。

モンゴルのカザフ人の人口は10万人に満たないが、モンゴルにおいては最大のマイノリティである。モンゴルのカザフ社会にはいくつかの祭りがある。ナウリズ（3月22日）、クフテム（4月の春祭り）、トイ・メレケイ（7月のモンゴル・ナーダム祭）、エレジェプ・ウスタウ（9月（9日間）の断食）、ラマダーン（10月～11月（30日間）に当る断食月）、オラザ・アイト（12月の3日間の断食明け祭）、シネ・ジル（1月、西暦の新年）、クルバン・アイト（2月の3日間）、アイト・ナマズ（70日後に行われる犠牲祭）である。これらの祝祭のなかで、最大の祝祭は、正月・春祭り「ナウルズ」¹⁷である。

カザフ人は、ナウルズの元旦（3月22日）に、まず「アクサカル」と呼ばれる長老の家に集って、冬の苦しみから解放され、大切な家畜が冬を越したことを喜び、互いの幸福を祈って新年・来春を祝賀する。「アカサカル」¹⁸とは、「白い髭」という意味の言葉であるが、それが、家長、氏族の長、あるいは「ホト・アウル」（宿営地を共にする牧民グループ）の長に相当するリーダー的人物である。元旦には、豊かさを示す7種類の食材で作った食べ物やヒツジ肉などを食べ、新たな1年間にこのような食べ物に恵まれますように祈る。

2006年の春、3月20日～22日の3日間にわたって復活した「ナウルズ祭」が行われた。21日の午後6時、ウルギー市にある国立音楽ドラマ劇所で「ナウルズ祭・コンサート」と国家勲章受賞式が行われ、バヤンウルギー県知事をはじめとする県の要人ら、そして、モンゴル国科学文部省の文化担当をはじめとする政府関係者らが出席した。記念コンサートは、「アイトゥス」（民族歌謡）をはじめ、民族楽器ドムブラ・アンサンブルの演奏などカザフの伝統的芸術を代表するものであった。22日には、ウルギー市

¹⁷ 「ナウルズ」の「ナウ(naw)」は「新しい」、「ルズ(ruz)」は「日」を意味するペルシア語であり、本来、イスラム教以前のゾロアスター教による新年の祝祭に由来すると言われている。太陽が春分点を通る春分の日に当たり、農事暦上重要であることからイランを中心に広い地域で行われてきた。
¹⁸ モンゴルのカザフ社会における「アクサカル制度」については報告がないが、中央アジアにおけるアクサカル制度については報告されている。王珂によると、「アクサカル」がウイグル社会において演じる社会的役割は、「各種の公職の候補者の推薦、郷、村にあてられた雑税と労役の各家庭への配分、刑事案件の審理、結婚・離婚・遺産継承などの問題の解決、土地売買の管理などであった」（王珂1995:21）。モンゴルのカザフ社会の場合は、制度としての組織性・集団性がウイグル社会ほど強くないようだが、儀礼・祭り、氏族や家族レベルにおいて、重要な社会的意味を持っていることは確かであろう。

中央広場で「ナウルズ祝祭」記念式典と市民によるパレードが行われた。パレードには、国立音楽ドラマ劇場、役所、ウルギー市の各区、学校（カザフ、モンゴル、トルコ系）、警察署、赤十字、また民間会社が、それぞれ異なるテーマでパフォーマンスを披露し登場する。最初に、音楽ドラマ劇団がチングス・ハーンとその騎馬隊を再現した。続いて、カザフ学校とモンゴル学校に通うカザフ人とモンゴル人の子供たちが、それぞれの民族衣装を身に着けて現われるほか、カザフ牧民の伝統儀礼や暮らしぶりが再現された。パレードが終了すると、行事は再び舞台へと移った。県知事がカザフ語で合図すると、クルアーン（イスラームの啓典）が誦まれ、広場に集う人々が抱き合って「ナウルズ」の挨拶「アマンダス」を交わした。つづいて、舞台上でドンブラ（カザフ民族楽器）演奏者50名と歌手による公演が30分間繰り広げられた。

中央広場文化センターの前に建てられた7つのカザフ・ゲル（カザフ伝統の天幕）の中に、カザフ人細工師によって作られた馬やイヌワシの道具、伝統衣装、絨毯、ドンブラ弦楽器などアンティークな品物が展示され、また、伝統的な食べ物が置かれるなどカザフらしい雰囲気とカザフ牧民の暮らしぶりが上手に再現された。この7つのゲルの中で、住民たちがそれぞれひとつの伝統儀礼を再現し、演技した。

バヤンウルギー県のカザフ社会では「ブルゲット」（イヌワシ）を自由自在に操り、狩を行う伝統があり、2000年以來、毎年10月第1週土曜日に「ブルゲッチディーン・バヤル」（イヌワシ・フェスティバル）が行われている。カザフ人にとって、イヌワシは、力と広大さ、洞察力を象徴しており、悪いモノを近づけない、或いはイヌワシが送られた男子は強くて勇敢な騎手になれる、と考えられてきたからである。カザフ牧民にとって「イヌワシ」とは「仲間であり、家族である。そして、生活の一部であり、祖先が残してくれた文化遺産、伝統そのもの、カザフ人の誇り」なのである。

日ごろの狩りの腕を披露するのがイヌワシ・フェスティバルである。2006年の秋も、9月30日と10月1日の2日間にわたって行われた。イヌワシ・フェスティバルは、イヌワシ・パレードとイヌワシ競技大会によって構成される。パレードは、ウルギー市中央広場で行われ、イヌワシ競技大会は、ボガト村（ソム）ホブド川沿いの谷サ



カザフのイヌワシ祭り

ヤット山麓の広いステップ（ウルギー市中心から東南 10 キロ）で行われた。鷹匠やカザフ人の男たちは、力と器用さを競い、イヌワシ狩りの腕を競い合う競技と、カザフ伝統の馬を使った競技で競った。イヌワシ・フェスティバルには、全部で 51 名が参加した。6 名の審査員（イヌワシ協会会長、イヌワシ研究者、新聞記者、役人、博物館館長、共同組合代表）が、競技ごとに点数をつけ、最も優れた鷹匠や村のチームを決めた。



カザフ伝統の馬の競技

5 モンゴル系エスニック集団の伝統復活

2004 年に、バヤンウルギー県に住むウリアンハイ、トゥバ、ドゥルベトの人々の社会生活を支援する目的で協会が設立された。そして、2005 年 4 月、「トゥバ、ウリアンハイ連盟」として再組織された。この組織は、そもそも、バヤンウルギー県に住むモンゴル系の人々（オイラート系の人々）のあらゆるレベルでの利益を守ること、生活支援、人材育成、伝統文化の保護、エスニック交流を目的としている。

彼らは、バヤンウルギー県に住むモンゴル系の人々の伝統文化が「危機的状況」にある、「カザフ人と我々（モンゴル系の人々）の文化には、同じような配慮をしなければならない」という主張を繰り返してきた。そして、彼らは、まず「危機的状況」にある自分たちが主導して伝統文化の復活に注意を払おうとしている。その結果として、2005 年 5 月（ホブド県ホブド郡で開催）と 2007 年 5 月（バヤンウルギー県ボヤント郡で開催）に全ヤスタンの民族集會が行われている。彼らは、まず、モンゴル民族衣装である「モンゴル・デール」を着る習慣、ウリアンハイ弓矢、宗教の復活に取り込もうとしており、このように、トゥバ、ウリアンハイの人々による活動が活発化しているのである。

全ヤスタンの民族集會では、モンゴル系の人々の伝統文化としての民族衣装、ウリアンハイ弓矢、歌謡舞踊などを披露するイベント、ショーが開催され、ウリアンハイ弓矢の大会が行われた。

ウリアンハイ弓矢をは、バヤンウルギー県に住むモンゴル系の人々の伝統のシンボル

としての意味を持っており、彼らの関係するところではどこでも見られるような存在でもある。また、バヤンウルギー県の民族劇所の中に、1部屋を設けさせ、モンゴル・モリン・ホール（馬頭琴）を学ぶ場所として開いている。彼らは、このように、伝統文化を独自の「場」を持って再現し、復活させようとしている。

2005年から、カザフの「イヌワシ・フェスティバル」にもウリアンハイの伝統弓矢を取り入れている。2006年の「イヌワシ・フェスティバル」では、カザフ人の民芸品展示場に並んで、ウリアンハイ弓矢を体験する一つの場を設けていた。モンゴル系の人々が、伝統衣装のモンゴル・デールを着て立ち、訪れる観光客や地元のカザフ人にウリアンハイ弓矢を教え、実際に体験してもらい、ウリアンハイ弓矢のすばらしさを実感してもらおうというのである。

おわりに

20世紀のモンゴルは、1920年代と1990年代を境に、大きな変化に直面した。1920年代の変化とはモンゴルの「社会主義化」かつ遊牧社会の「近代化」であった。ひとつの「社会主義モンゴル・ウンデステン」を作り上げるということで、民族の同化政策が取られた。1990年代以後の「ポスト社会主義」においては、すでに解決されたと固く信じられてきたエスニシティ問題は、西部モンゴルのカザフ人とモンゴル系エスニック集団・ヤスタンをめぐる民族的対立（民族紛争）として現れた。

その背景にある要素のひとつは、バヤンウルギー県における「カザフ化」問題である。社会主義期には、モンゴルのエスニシティは「ひとつのウンデステンと多数のヤスタン」として認識されたが、モンゴル西部では「チュルク化」を内包していた。特にバヤンウルギー県ではカザフ化が著しかった。民主化後、かつての「ひとつのウンデステンと多数のヤスタン」というエスニック構造から「2つのウンデステン、多数のヤスタン」というエスニック構造へと変わった。つまり、カザフ人は、ハルハ人と並ぶ「ウンデステン」になったというわけである。この背景には、カザフスタンの独立が大きいだろう。つまり、カザフ人の母国であるカザフスタンの独立が「ウンデステン」としてのカザフ社会の再編と伝統の復活、カザフ・アイデンティティを強化するひとつの要素になったといえるのではないだろうか。

カザフのエスニック・アイデンティティの表出のもうひとつの要因は、カザフスタンへの「移住」の問題である。モンゴル政府は、この「移住問題」に対して柔軟な対応を示し、それがカザフ社会にとって有利に動いたといえる。この背景にはモンゴルとカザフスタンの関係の強化がある。それは、モンゴルが、カザフスタンを重要な経済的パートナーシップとして位置づけているからである。両国関係のカギは、カザフ族の一部であるモンゴル西部のカザフ人自身にあり、モンゴル政府の対応は重要な要素になってい

るのである¹⁹。

その一方、国境を越え、行き来するカザフ人たちの移動によって、文化の移動・伝播も見られる。モンゴルから移住したカザフ人たちは、かつてロシア化していたカザフスタンにおいてカザフ伝統の復活に貢献し、また、彼らによる文化の伝播もカザフ伝統文化の復興につながる要素となった。一時、移住によって弱体化しつつあったバヤンウルギー県のカザフ社会は、このような文化的交流と相互作用によって再編されつつあるといえる。

「マイノリティのなかのマイノリティの問題」として解釈されている問題も深刻である。特にバヤンウルギー県のモンゴル系エスニック集団の人々（ウリアンハイ、ドゥルベッド、トゥバなど）の団結という最近の動きにも注目すべきである。諸モンゴル系エスニック集団による団体が合体し、2005年4月、「トゥバ、ウリアンハイ連盟」が設立された。同年5月25日に、バヤンウルギー県で、全ヤスタン（エスニック集団）民族会が開かれ、7月16日に仏教寺院が開かれるなど、「トゥバ、ウリアンハイ連盟」による活動が活発化している。この連盟は、バヤンウルギー県におけるモンゴル系エスニック集団の人々の生活支援、社会的保証、伝統文化の保護問題をひとつの大きな目的としているようである。

西部のカザフ化、カザフ人の自発的移住、自由な行き来、または、それらへのモンゴル政府の優遇対策などが一体化して、モンゴル系エスニック集団の民族運動に大きく影響を与えているといえるのではないだろうか。その一方で、これらの問題が、逆に、モンゴル系エスニック集団としてのアイデンティティの再確認、伝統の復興への取り組み、社会的統合などに有利に働く要素になったと考えられる。

カザフ社会におけるイスラムと伝統文化の復活の傾向は著しいが、ポスト社会主義下における、このような複雑なエスニシティの変動とエスニック集団間の関係の変化は、カザフの伝統の復活のありかたに反映している。「ナウルズ祝祭」ではカザフの伝統が様々な形で表現されたが、そのパレードでは、音楽ドラマ劇団がまず、モンゴルのマジョリティであるハルハの伝統の象徴として、チンギス・ハーン軍を再現した。さらに、イヌワシ・フェスティバルでは2005年からウリアンハイ人の伝統弓矢も取り入れている。このように、モンゴルにおけるマイノリティであるカザフ社会は、隣国カザフスタンとモンゴルの関係などを背景に、マジョリティであるハルハと対等なウンデステンとしての立場を主張すると共に、ハルハへの配慮を示し、一方でモンゴル西部においてマイノリティの中のマイノリティの立場にあるモンゴル系エスニック集団からの反発への配慮も見せている。

グローバリゼーションの波が遊牧社会であるモンゴルにも及んでいる現在、そのカザフ社会が、市場経済化、ナショナリズム、移住、国家及び他のエスニック集団との関

¹⁹ この移住は、市場経済化、逆移住者・帰国者問題などさまざまな問題と関わっており、その諸問題は今まだに未解決のままである。これをどのように解決していくか、カザフスタンとどのような形で協力していくべきかが、モンゴルが直面する問題のひとつでもある。

係、伝統文化の維持・保護、観光開発といったさまざまな社会的文化的問題に直面しているのが現状である。カザフ人社会は、今後、「国家（モンゴル）」・「本国（カザフスタン）」・「周辺のエスニック集団・ヤスタン」が絡み合う複雑な関係のなかで、「カザフ人としての顔」をどう維持し、そして変えていくのだろうか。

参考文献

- ・綾部恒雄（編）1993『現代世界とエスニシティ』、弥文堂。
- ・王柯 1995『トルキスタン共和国研究—中国のイスラムと民族問題—』、東京大学出版会。
- ・上村明 2000「モンゴル国西部の英雄叙事詩の語りと芸能政策」、国立民族博物館 (http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/kamimura/articles/ace_japan.html)
- ・バートルガ S.、稲村哲也 2002「モンゴル西部の少数民族カザフ社会をめぐる国際関係と国家の政策」、『リトルワールド研究報告』、18:27-48 頁。
- ・バートルガ S. 2003「モンゴルのマイノリティ「カザフ」社会の現状と変化—モンゴルの市場経済化とカザフスタンへの移住—」『愛知県立大学国際文化研究科論集』、4:109-131 頁。
- ・バートルガ S. 2004「社会変動と移民社会の現状—カザフスタンにおけるモンゴル系カザフ人を中心に—」『愛知県立大学国際文化研究科論集』、5:111-126 頁。
- ・バートルガ S. 2007「ポスト社会主義モンゴル国における伝統の復興とエスニシティ—カザフ社会における二つの儀礼をめぐる—」、『愛知県立大学国際文化研究科論集』、8:109-129 頁。
- ・藤井麻湖 1998「モンゴル国におけるエスニシティ」、小長谷有紀・楊海英編『草原の遊牧文明』、財団法人千里文化財団、117-119 頁。
- ・Badamhatan S.1980 (1973) BNMAU-iin Undestnii ba Ugsaataunii hugjliin asuudald (モンゴル人民共和国におけるウンデステンとオグサータンの発展に関する諸問) , *Tuuhiin sudlal*, pp.17-21.
- ・Bayan-Ulgii 2005 *Statistikiin medee* (バヤンウルギー県統計), Ulgii
- ・Chuluunbaatar S. & Onjoon Sh. 1990 Uuguul nutgiin uraingaichuud haichiv? (本来のノタッグ (故郷) のウラインハイたちはどこへ?) *Hudulmur*, No.46
- ・Islam.H 2000 Undestnii hugjliin tuviig demjeeguid Kazakhuud setgel dunduur baina (カザフ民族発展センター設立への対応にカザフ人たちは不満を感じる) “*Mongoliin Medee* (モンゴル・ニュース)” No.026 (521)
- ・Kazakh Undestnii Ev Negdliin Hudulguun 1990 Mongoliin ard tumend ilgeeh zahidal (モンゴル人民に送る手紙), p.1, Ulgii.
- ・Mongol Ulsiin Undesnii Statistikiin gazar 2001 *Bayan-Ulgii aimgiin toollogiin dun*, Ulaanbaatar.

- ・ Tserenhand G. 2005 BNMAU-iin Ugsaatnii bureldehuun (モンゴル人民共和国民族構成)
Mongolchuud:Ugsaa-Soyol, zan zanshil ”, pp.11-14, Ulaanbaatar

著者プロフィール

スヘー・パトルガ (Sukhee Battuluga) モンゴル国立大学講師、愛知県立大学客員共同研究員・非常勤講師 文化人類学

■略歴：モンゴル国生まれのモンゴル人。1994年、モンゴル国立大学国際関係学部日本学科を卒業後、同大学大学院へ入学。その後、同大学に講師として就任。2000年、来日し、愛知県立大学大学院国際文化研究科に入学。2005年3月、愛知県立大学大学院国際文化研究科博士後期課程を満期退学。愛知万博モンゴル館コーディネーターを経て、現在、愛知県立大学の客員共同研究員、非常勤講師（文化人類学専攻）。

■これまでの研究活動：エスニシティ、移民に関する文化人類学的研究を行ってきました。特に、いくつかの地域に分散して暮らす民族の動態に注目し、イスラーム系カザフ人が住むモンゴル国西部及びカザフスタン東部でフィールドワークを実施してきました。

■これからの研究活動：いままでの研究範囲をさらに拡大し、モンゴルと周辺地域との関係を視野に入れて、グローバル化とエスニシティとの関係を考えていきたいと考えています。日本での生活経験を生かして日本を研究対象とした研究も行っていきたいと考えています。

■「共生」について：まず、「異」が「異」に関心を持ち、または、「異」であることを意識・認識し行動することからはじまること。



カザフの伝統衣裳で